

西脇詩の世界を「再発見」

西脇の生涯における「二度の大きなターニングポイント」

皆川 勤

加藤孝男、太田昌孝 著
▶ 詩人 西脇順三郎

その生涯と作品
5・31刊 A5判168頁 本体1800円
クロスカルチャー出版



わたしは四十六、七年ほど前、たまたま偶然、小千谷を訪れ、西脇の生家を見ている。その頃、もちろん西脇順三郎（八九四〜一九八二年）という名前は認知していたが、作品にはまだ接していなかった。現代詩はかなり読んでいたが、なんとなく敬遠していたというのが正直な思いであった。後年、自分から進んでというのではなく、必要があった『Ambarvaia』（一九三三年刊）を読む機会があり、その詩世界にたいし率直に共感を抱いたといっている。その

後、旅人かへらす』（一九四七年刊）を読み、戦時下を挟んでの空白期を経て、戦後、刊行された詩集の世界に親近感を持つとともに、かつて訪れたことがあった小千谷という場所を想起しながら様々なことを感受していったことにな

る。本書は、「新潟日報」紙に二〇一四年六月から一五年一〇月まで連載されたものを纏めたものだといふ。なによりもひとつの機縁を思わないではいられない。連載を始める前二人の共著者はずいぶん、「小千谷とロンドン」という西脇の精神形成において重要な場所へ赴任することになった（加藤孝男の）だといふ。本書は全四章の構成で、第四章は、「西脇順三郎の詩の魅力をおぼしめし」と題して詩作品をめぐって論じている。第一章から第三章までを「西脇順三郎の魂にふれる旅」として、故郷・小千谷、留学先の英国、そして帰国後、東京と最後の場所でもあった小千谷との往還にふれながら、その生涯を描いていくわけだが、著者たちは西脇と同じ場所にいたという感慨が、「魂にふれる」といういい方に象徴化させていると理解できる。西脇に『超現実主義詩論』（一九二九年刊）や『シュルレアリスム文学論』（三〇三年刊）の著書があることで、わたしが距離感を持ったことの

意識や夢といったものを描くことで、社会にからめとられることに意識を解放するところに意義を見いだしている。その作詩法は、時に無作為に言葉を連ねていくというような方法によった。しかし、西脇はこうした無意識によりかかった作詩法を批判し、独自の『超現実主義』の考え方を導いている。西脇が繰り返して述べるのは、人間がもっている習慣化した意識を打ち破り、新たなヴィジョンを描くことであった。そのために、遠く離れたイメージを連結して、詩を作れと言った。（加藤孝男）この加藤の論述によって、わたしは、自分自身の異和感を私拭するとともに、「遠く離れたイメージを連結した『Ambarvaia』（ロンドン）で知りあひ結婚したマージョリ・ビッドルと離婚した翌年の刊行ということになる」という詩集を直ぐに想起することになる。西脇の生涯に視線を向ける時、「二度の大きなターニングポイント」があり、ロンドン時代と、小千谷へ疎開することになった「四四年から四五年にかけての九カ月」だったとして、太田昌孝は次のように述べていく。「私自身、四〇回ほど当地を訪れたが、小千谷を深く知れば知るほど、その民俗、伝統、自然が醸する豊かな魅力に心打たれた。そして、この小千谷で一八年に及ぶ、青少年時代を過ごした西脇の精神的基層には、ほぼ無自覚的にこの雪深い町が持つ諸要素が滋養のように堆積していったのではないかと考えるようになった。（略）折口によって掘り起こされた日本民俗への関心が、実は自身のなかでたしかに堆積していたことを、西脇は小千谷での疎開生活においてまさに『再発見』した。『西洋と東洋の融合』という独自の詩的フラスコを完成させることになるのである。」もちろん、ここで太田が指摘しているのは、『旅人かへらす』を想起してのことである。折口を始め、柳田國男との交流があったことを、わたし自身はそれほど重要視してこなかったが、太田の論及には承服せざるをえない。わたしは一度しか小千谷を訪れたことはないが、それでも、自分が生まれた雪国・秋田と共通する情感を喚起されたことはいままでもない。

戦時下には詩が書かず、当然戦争賛美詩とは無縁なかつたで、戦後『旅人かへらす』を著したことの意味は大きい。「戦争であらゆるものが失われてしまった日本人にとって、想像力さえあれば、一篇の詩からでも夢を見ることができたのである。（加藤孝男）こうして、本書はわたしに、西脇詩の世界を『再発見』させてくれたといっている。（評論家）